

---

# リボーンに転生トリップしちゃいましたー!?

水月穂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リポーンに転生トリップしちゃいましたー！？

### 【Nコード】

N0132Z

### 【作者名】

水月穂

### 【あらすじ】

はい、はじめまして

水月穂です

フラン大好きです

虐めが少し入るかも…

でもネタバレするとボンゴレ全員（ヴァリアー除く）味方

## 設定

吹雪 雪

大人しくて優しい性格

いつもニコニコしていて皆を癒してくれる

喋り方はフランと同じ

転生する前は中二

二重人格で普段は優しく冷静だがもう一つの人格は残酷で熱い性格

もう一つの人格の名前は霰<sup>あられ</sup>

そのせいでかなり頭を悩ませてる

転生する前、事故で家族全員死んでる

属性は大空の七属性と雪

武器は幻術、ナイフ 霰の時に使う、扇

吹雪 霰

事故で死んだ雪の姉

熱い性格

今は人格として雪の中に取り付いてる

属性、雪の説明

雪の炎は白くて雪の結晶が舞っている

雪の特性は凍結

## プロローグ

雪side

部活で遅くなりました

買い物して帰らないとです

今日はテストで100点取ったからご褒美にハーゲンダッツでも買  
いましょうかね……

ん？

猫「ニヤン」

猫が道路に飛び出しました

危ない！！

ミーは咄嗟に猫を庇って宙に舞いました……

朦朧とする、意識の中で見たものは、血まみれになってる猫です……

……

……守れなかったんですね

そこで私の意識がなくなりましたー

雪「ここは……何処ですか？」

ここは真つ白な部屋

猫「ニヤン」

雪「お前も来たんですか？」

猫「そうだよ、雪ちゃん」

雪「へ？喋った！？」猫『私の言葉が分かるの！？』

ガチャ

雪、猫「??！」

????「えつと……その……スマン!!！」

雪「なんで謝ってるんですか？」

????「わしは神様なんじゃが、おぬしを誤って殺してしまったん  
じゃ」

雪「それは仕方のないことですよ、命あるもの必ず死ぬんですから」

神様「じゃが……そうだ!!おぬしをリボーンの世界に転生させ  
てやる」

雪「本当ですか?!」

神様「ああ、そのかわりアルコバレーノになってもらうがな」

雪「へ!？」

神様「おぬしには雪という珍しい属性が有るから」

雪「そうなんですか……分かりました」

神様「原作ブレイクもやっていいし、あと、未来編に近づいてきたらちよう強力なおしゃぶりケースをやるう」

雪「分かりました」

神様「それとその猫をペットにもして良いぞ?」

猫「やった」

神様「雪の炎の特性は凍結じゃ、くれぐれも気をつけるように」

雪「はい」

## 標的ー アルコバレーノになる日

雪side

あれから3年が経ちました……

三年間の事を纏めると

- 1 ・私は大空の七属性全部を持っていること
- 2 ・神様から連絡があつて虹の属性についてイレギュラーがある
- 3 ・原作にはでてこないイレギュラーが出てくる可能性がある
- 4 ・早速虹の波動を持つイレギュラーを発見
- 5 ・フランが虹の波動を持ち、今日、一緒にアルコバレーノになる
- 6 ・私とフランは幼なじみ
- 7 ・なんだかんだでフランと一緒に骸との修業を受けている

……しかしフランと幼なじみでイレギュラー化するなんて驚きです  
だってフランは私の見たところ十代、でもそれは十年後の歳であつて、原作突入時はまだ一桁の歳のはず……

しかもこれは原作突入時の十年前くらい……

あ、そういえば九代目はもうツナに会いましたかね？フラン「雪？

行きましゅよー？」

雪「うん」

因みに私が転生者ということは言ったよ

師匠にも……………

ちゃんと受け止めてくれて嬉しかったな

あ、因みにここはイタリアのホテル

とりあえず幻覚で親を作つといた

雪「行こう、フラン」

フラン「はいー」

待ち合わせ場所

????「遅い……………」

????「ムムツ…僕を待たせるなんて罰金だよ」

????「しょうがないですよ、まだ三歳児なんですから」

????「そうよ……………それにそろそろ来るわ」

????「しかし、なんであんな小さな子が選ばれたんだ？」

「あいつら小さいながらかなり凄腕のヒットマンだ」

「あんな小さい子供がか!？」

「俺が調べたところ、最近有名になってきた奴らだ」

「通り名は？」

「コンビ名はアルカンシャル・ネージユ、通り名はフランの  
ほうが虹の幻術師、雪のほうが二重の雪」

「二重？」

「由来は二重人格で普段は穏やかで殆ど幻術で倒してるがも  
う一つの人格は熱く残酷にナイフで殺して来た、雪の通り名は後二  
つ有るが聞くか？」

「どんな通り名？」

「雪の舞姫、雪の切り裂き姫」

「………何勝手に人のことはなしてるんですか？ヴェルデ」

「ふん、何故お前達が最強の九人に選ばれた理由を話して  
ただけだ」雪「あ、そう」

「えつと」

「遅れました、先輩方」

フラン「すいませんでしたー」

リボン「棒読みで言われてもな」

フラン「あ、これがミーの喋り方でしゅのでー」

雪「早く逝きましょー?」

ルーチエ「漢字が違うわよ……」

雪「ところでお腹の赤ちゃん元気ですか」

ルーチエ「ええ」

雪「よかったです」

ルーチエ「ありがとう」

リボン「あの二人……気が合うみたいだな」

フラン「二人とも、人を疑う事を知りましえんから」

リボン「言うじゃねえか……気に入った」

フラン「どうもでーしゅ」

バイパー「和んでる暇があるなら早く目的地に行ったほうがいいと思っよ」

あんまし行きたくないけど……

しょうがないよね……………

ルーチエもそれを覚悟の上でアルコバレーノになったんだから私も逃げちゃダメ!!

そして山道

そろそろかな？

ザッ

ラル「誰だ!!」

???「俺だ、コラッ」

ラル「…………コロネロ?!」

コロネロ「そっだ、コラッ」

雪「着いて来たんですね」

コロネロ「……………?小さい子供?か、コラッ」

雪「失礼なお兄ちゃんです」

フラン「まあまあ」

コロネロ「ところどころいつ、さっきからついて来てるんだけど?」  
「ラッ」

猫「雪ちゃん」

雪「ミルク?!」

ミルク「ついて来ちゃった」

雪「どうして……………」

ミルク「だって雪ちゃんが心配なんだもん」

雪「ミルクが私を心配してくれるのは嬉しいけど……………」

リボーン「…?猫の言葉が分かるのか?」

フラン「動物の言葉が分かるらしいでしゅー」

リボーン「ほう」

ルーチエ「素晴らしい能力ですね」

そしてなんだかんだで山の頂上

ラル「コロネロは離れている」

コロネロ「…?分かったぜ!!コラッ」

フラン「疲れましたー」

雪「私も……………」

フラン「あれは……………」

雪「とつとつです」

フラン「そうですねー」

グワッ

一同・雪、ルーチェ「…!?!」

今私達の目の前にどす黒いものが迫ってきてます

フラン「怖い……………」

雪「フラン……………」

ギユッ

フラン「…!?!」

雪「大丈夫ですよ、私がついてます」

フラン「はいー」

コロネロ「くっ!?!」

呪いが掛かる瞬間、コロネロが飛び出しましたー

ラル「…!?!?コロネロ!?!」

ピカッ

雪「えっと」

フラン「うーんとー（。・。・）」

雪「フラン……………だよな？」

フラン「はいー…雪……………でしゅか？」

雪「うん」

フラン「視線が低いでしゅー」

雪「私達はそんなに変わらない気がしますけど？」

フラン「それもそうでしゅねー」

一同・雪、フラン「……………」

雪「やっぱこの運命はまだ誰も受け止められませんか……………」

フラン「この体、成長しないんでしゅよね？」

雪「大丈夫ですよ」

フラン「?..?」

雪「ルーチエ、帰ってもいいですか？」

ルーチエ「ええ、解散よ」

雪「行きますよ」

フラン「待つてくださいー」

リボーン「…餓鬼は無邪気だな」

風「でも、ルーチエの優しさとおの子達の無邪気さがあつたから、私達はうちとけられたんですよ」

リボーン「言えてらあ」

こうして、私達のアルコバレーノになった日は終わりました

**標的Ⅱ 突然の襲撃（前書き）**

一気に黒曜編まで行きました……

さあせん

## 標的 二 突然の襲撃

雪 side

なんか作者が面倒臭がって黒曜編まで飛びました

えっと今までの事を整理すると

フランと私が付き合ってる

なんやかんやでリボンにアルコバレーノだと言う事をばらされた

ツナとはお隣りさん

なんか神様の手違いで雪の特性と虹の特性が増えた

並中狩りが始まった

くらいかな？

雪「師匠……………」

フラン「多分ミー達は狩られないとは思いますがけどね……………」

雪「確かに……………何処の世界に弟子を狩る師匠がいるんでしょう?」

あ、因みにここは学校ですよ

獄寺(どうなってんだ?欠席してる奴が多いし……………十代目も来てね

え

ピー

携帯が切れましたね

獄寺「あつ、切れた……………」

獄寺「携帯の電池切れたんで帰ります」

雪「私も暇だし…帰ります」

フラン「待ってくださいー」

先生「こら、獄寺！！貴様遅刻してきて今来たばかりだろ！！」

ガラッ

先生「お前もだ！！」

先生の声が聞こえたけど無視

並盛商店街

獄寺「……………なんでついて来るんすか？」

雪「安全の為」

獄寺「そうすか……………とりあえず飯でも食つか」

フラン「そうですねー」

ガサゴン

チャリ

獄寺「げっ65円……………」

フラン「うまい棒六個買えますねー」

???「並盛中学一年A、出席番号八番、獄寺隼人……………」

獄寺「んん？」

フラン「柿ピー……………」

千種「早く済まそう……………汗、かきたくないな……………」

獄寺「ふう……………なんだ？てめえは？」

千種「黒曜中、一年、柿本千種……………お前を壊しに来た」

フラン「ミー達もいることを忘れないくださいー、柿ピー」

獄寺「知り合いか?!」

雪「まあ……………ちょっとした……………兄弟子？」

獄寺「ふーん……………はぁ……………なんでこう毎日他校の奴に絡まれるんだ？結構地味に生きてんのに」

雪「裏社会& a m p・不良なんだから地味に生きてるとは言わない  
と思うけど……………」

獄寺「分かった、来やがれ  
売られた喧嘩は買うのが主義だ」

フラン「これだから他校の奴らに絡まれるんですよ……………」

雪「同感……………」

通行人A「なんだあ？喧嘩かあ」

通行人B「面白いじゃん」

千種「……………見せ物じゃない」

シュツ

無数の針が通行人に襲い掛かる

カキン

雪「危なかった……………」

私は扇をブーメランのようにして投げて千種の投げた針を防ぎました

雪「早く避難してください」

通行人AB「ひいー」

逃げましたね

獄寺「ナイスです!!雪さん!!」

千種「……………雪、邪魔しないでくれる?」

フラン「師匠といえど、仲間には手出しさせません」

千種「フラン……………生意気……………これ以上邪魔が入るとめんどい…  
…急ぐよ」

シユツ

カキン

雪「獄寺君、こっち!!」

私は扇を盾の代わりに使い、獄寺君と物陰に隠れた

シユウ

そして獄寺君はボムを投げた

でも千種はヘッジホッグを取り出しそしてボムに攻撃した

獄寺「ヨーヨー?」

雪「そう……………千種の武器は毒針が仕込んであるヨーヨー、ヘッジホ  
ッグ」

ドカーン

獄寺「うわっ」

爆発し、獄寺君が爆風に吹っ飛ばされた

クルッ

ぞあ

獄寺君は空中で回転し、見事着地

獄寺（こいつ……ただの中坊じゃねえ……さっきといい、戦い方  
といい……プロのヒットマンだ！）

獄寺「てめえ、何処のファミリーのもんだ!？」

千種「やっと……当たりがでた……」

獄寺「ああん!？」

千種「お前にはファミリーの構成、ボスの正体、洗いざらい吐いて  
もらっ……」

獄寺「なにに!？」

シュルルル

獄寺「ぞあ」

スタ

飛んで避けて綺麗に着地

獄寺「狙いは十代目か!？」

雪（早く来て!!ツナ君……）

続く

標的 二 突然の襲撃（後書き）

次回……………傷つく友たち

## 標的三 傷つく友たち

雪side

獄寺「柿本千種とか言ったな……………お前等の狙いは十代目か!？」

千種「……………」

獄寺（ならぜってえ食い止めねえと……………）

シュウ

獄寺「二倍ボム!！」

シュルルル

獄寺「なっ!？」

またさつきと同じ……………ヘッジホッグで導火線を切ってる

そして獄寺が囲まれました!？」

獄寺（囲まれた!？俺のスピードじゃ避け切れねえ……………出来ればこの技を使いたく無かったぜ……………いくらちびボムだからって……………）

ドカーン

獄寺君がちびボムを取り出し、後ろに投げました

千種「なっ!?!」

獄寺（いてえんだよ!?!）

そして爆風で獄寺は千種に突進しました

獄寺「食らいな!?!」

千種「くっ」

千種は間一髪避けました

獄寺「まだだぜ!?!」

獄寺はボムを出し

獄寺「二倍ボム!?!」

千種「脳の無い奴……………」

シュルルル

フラン「本当ですよー」

雪「それが狙いじゃない」

フラン「えっ?」

千種「なっ」

ドカーン

千種「くっ」

今ので相当なダメージを負ったはずですが

獄寺「へへへへ……ざまあねえな」

フラン「そういう獄寺もボロボロですよー」

獄寺「うるせえ………てめえは簡単なトリックに引っ掛かったのさ  
俺が二倍ボムの掛け声と友に通常のダイナマイトを放った時、既に  
放っていたちびボムが同じ大きさに見える程お前に接近してたのさ  
…ボンゴレ嘗めんじゃねえ」

千種「くっ」

獄寺「果てな」

フラン「柿ピー………」

雪「大丈夫？」

フラン「はいー」

ドドドカーン

ツナ「はあはあ」

ツナ（この爆発音ってまさか）

ツナ「獄寺君！！」

雪「ツナ君！！」

獄寺「十代目！！どうしてここにっ」

ツナ「うん、獄寺君が黒曜中に狙われてるって」

獄寺「なっ……………そのためにわざわざ  
恐縮っす……………今、やっつけた所っす」

フラン「遅いんですよー」

ツナ「ええ！？」

獄寺「そこら辺に転がしといたので  
……………あれ？いない」

ツナ「ええ！？」

千種「手間が省けたね……………」

グロテスク……………千種

ツナ「ひいいい」

ツナ（この人が黒曜の……………なんかやばそうだ！？）

雪「そりゃ並中風紀委員が倒される程だからね」ツナ（心読まれたあ）

シユツ

ツナ「うわあ!？」

千種は毒針を投げました

ザッ

獄寺君が庇おうと前に立ちました

カキン

更に私が毒針を弾きました

ツナ「獄寺君!？雪ちゃん!？」

雪「あつぶな」

獄寺「あ……………サンキュ」

雪「はいはい」

フラフラ

千種が近づいてくる……………

やっぱりグロテスク

ツナ「ひいいい」

獄寺「十代目には指一本触れさせねえ!!」

千種「壊してから………連れていく」

獄寺「お逃げください!!十代目」

ツナ「でも!!」

千種「めんどい………早く済ませよう」

ツナ「ひいいい」

???「なんかやばそうだな」

ツナ「山本!？」

山本「通り掛かったら、騒ぎが聞こえてき、来てみたら………こいつは穏やかじゃねえな」

ツナ「………」

雪「山本君!!」

山本<sup>キッ</sup>

ツナ（滅多に怒らない山本が………）

千種「邪魔だ……………」

シユルルル

山本<sup>キッ</sup>

ザクツ

おお……………山本君、ヘッジホッグを真つ二つにしちやった

ツナ「斬った！？つか何時から山本のバット常備！？」

雪「そりゃ野球にも使えるし……………」

千種「そうか……………お前は並盛中、一年A、出席番号十五番、山本武」

山本「だったらなんだよ」

ツナ（あっ……………そういえば山本って並中喧嘩の強さランキング二位だった）

人「お巡りさん！！こっちです！！」

げっ……………警察

警察「こら！！君達！！何している」

千種「お前は剣のほうだ……………揉めるのめんどい」

そう言つて千種は差つて行つた

獄寺「ぐっ」

バタッ

獄寺君が倒れた

ツナ「獄寺君！？大丈夫！？」（焦）

山本「しっかりしろ！！獄寺！！」

病院

ビアンキ「どうして隼人が入院してるのがここのよ」

シャマル「ビアンキちゅわーん」

ゲシッ

ビアンキ「寄るな！！」

シャマル「なんだよ……リボンに言われたからベッド貸してやっ  
たんだぜ？」

ビアンキ「隼人の看病は私がするわ……邪魔するなら出てって」

ツナ「ビアンキ……」

なんか逆効果な気もするけど……

シヤマル「んなことしたら……治るもんも治らんぞ？」

ツナ、雪、フラン「確かにノですー」

山本「あはははは」

ビアンキ「山本武……何が可笑的い」

山本「いつ……俺……やつ……俺……別に……」

ビアンキ「別にとって何？」

山本「何って……別に」

ツナ（獄寺君……俺のせいで）

雪「ツナ君……ゴメン……私がもつとしっかりしてたら」

ツナ「雪ちゃん……でも、獄寺君を守ってくれたじゃないか！！  
だから軽傷ですんだんだよ」

フラン「落ち込まないでくださいー」

雪「何もやってない人に励まされても……」

フラン「あ……」

ツナ「ははは……」

ガラガラ

ツナ「ああ……………俺、馬鹿だ  
足手まといになっちゃって……………行かなきゃよかった」

リボーン「後悔している暇はねえぞ、ツナ」

ツナ「なんだそれ!？」

雪「ハンモック?」

ツナ「ってか何してたんだよりボーン、この大変な時に」

リボーン「イタリアで起きた集団脱獄を調べてたんだ」

ツナ「だ、脱獄?!」

リボーン「ああ、二週間前に大罪を犯した凶悪なマフィアばかりを  
収容している監獄で脱獄事件が起きたんだ  
脱獄の主犯は骸という少年」

雪、フラン（ピクツ）

リボーン「部下二人と日本へ向かったという……………  
そして十日程前、突然黒曜中に帰国子女として三人の少年が転入し  
た」

ツナ「まさか……………」

リボーン「転入早々、黒曜中学の不良を占めて、リーダーに収まっ

た男が……六道骸という名だ」

雪、フラン」……………」

フラン（はぁ……………本当に何やってるんでしょー）

雪（確かに）

ツナ「もしかしなくても、同一人物!？」

それって、何気なく相手がマフィアということ?!!」

リボーン「逆だぞ

奴らはマフィアを追放されたんだ」

ツナ「ああ!!俺どうなっちゃうの!?!」

リボーン「骸達を倒すしかねえな」

ツナ「バカ言え!!そんな奴らに勝てる訳無いだろ!!」

リボーン「出来なくてもやるしかねえぞ」

ツナ「はぁ!?!」

リボーン「お前宛ての手紙だ」

ツナ「誰から?」

リボーン「ボンゴレ九代目からだ」

ツナ「なあ！？九代目?!」ガサッ

リボーン「『親愛なるボンゴレ十代目

君の成長振りはリボーンから聞いているよ

さて、君も次のステップを踏み出す時が来たようだ

君に指令を言い渡す

六道骸以下、脱獄集を速やかに捕獲

そして捕らえられた人質を救出せよ

幸運を祈る』」

ツナ「ちよっ、なんだよそれ!?!」

リボーン「『追伸、断った場合は裏切り者と見做す』」ツナ「わあ

!!俺には関係無いよ!!」

雪「ツナ……………」

リボーン「お前等はどうすんだ?」

フラン「ミーはパス」

雪「私も……………」

リボーン「そうか……………」

雪「じゃあ私達帰るね……………ちやお」

リボーン「ちやおちやお」

標的三 傷つく友たち（後書き）

次回、ヴァリアー来る

## 標的④ ヴァリアー来る(前書き)

早いと思ったら終わりです

今回はオリジナル満載です

## 標的四 ヴァリアー来る

雪「side」

暇…

フラン「雪」

雪「ん？」

フラン「デート行きませんか？」

雪「うーん…並盛商店街でなら…いいよ？」

フラン「え〜」

雪「今日は日曜日だよ？多分何処も込んでるよ…」

フラン「分かりましたー…並盛商店街でいいですー」

それに…ヴァリアーがそろそろ来ると思うし…ね

並盛商店街

スタスタ

フラン「何処に行きますー？」

雪「うーん…ラ・ナミモリーヌに行こう」

フラン「太つても知りませんよー」

雪「もう…太らないよ…ちゃんと適度な運動をしてるの知ってるでしょ？」

フラン「そうでしたねー…たまにはカップルらしい会話をしようと思っただけですけどねー」

雪「もう…／＼／」

???「おい、そのバカップル」

フラン「…幻聴が聞こえたんですけどー」

雪「奇遇ですね…私も聞こえました」

???「ちよつりポーン!!」

リポーン「無視すんじゃないっ!!」

フラン「はあ…なんのようですかー？ミィ達…今デート中なんですけどー…邪魔立てするならスプラッターな幻覚見せますよー」

フラン「あれ？今日補習じゃありませんでしたっけー」

山本「サボってきた」

成る程…やっぱヴァリアー今日来るみたいね…でも、虹と雪の守護者は誰だろう？

恐らくこっち側の虹と雪の守護者は私とフラン…

向こう側は多分イレギュラー…

なんだろう…嫌な予感がする…

フラン「どうしたんですかー？」

雪「はっ…なんでもないよ」

ドカーン

ツナ「な、何!？」

京子「あー！ー！ー！ー！ツナ君あれ!？」

ツナ「えっ!?!えー！ー！ー!?!？」

空から人が…!!あれは…バジル君

このままじゃツナ君が

スウー

ポヨン

おお!!フランがバジル君を有幻覚で救いましたー

…メルヘンにシャボン玉なのは気になりますか…

フラン「ふう…ミィだってやる時はやるんですー」

バジル「う…ありがとうございます」

ツナ「だ、誰!？」

バジル「…お主…」

ツナ（お主?この二十一世紀にお主?!）

獄寺「十代目!！」

ハル「ツナさん」

山本「大丈夫か?ツナ!！」

ツナ「うん、フランが助けてくれたから…」

京子「よかった…」

リポーン（ん?なんであいつが此処にいるんだ?）

????「ヴオオオオイ」

バジル「はっ…ぐっ」

スクアールだ

スクアール「なんだあ?外野がぞろぞろと?邪魔するカスはたたっ

斬るぞー!!」

獄寺「ああ?」

山本「うっ」

ツナ「な、なんなの一体」

リボーン「嵐の予感だな…」

雪「うん…」

スクアール「いくぞおー!!」

ドカーン

くっ…スクアールが衝撃波を放ってきた

ツナ「うわああ!?! なんなの、あの人お!?!」

スクアール「ヴオオオオオオオ」

京子「ああああああ」

ツンツン

京子「あっ」

リボーン「女子供は非難するぞ」

京子「リボーン君」

ハル「ハヒツ」

京子「じゃあ雪ちゃんも」

リボーン「あいつは大丈夫だ」

ハル「でも!!」

リボーン「あいつはしっかりしてるからな……」

京子「…分かった」

バジル「すみません、沢田殿」

ツナ「えっ!?!」

バジル「付けられてしまいました……」

ツナ（誰だっけ…あっ!?!死ぬ気の炎!?!）

バジル「せっかく会えたのに…こんな危険な状況に巻き込んでしま  
うとは……」

ツナ「えっ!?!あ、あの…誰でしたっけ?」

バジル「来て下さい!?!」

ツナ「え?ええ??!」

獄寺「あ、おいこら！十代目を何処に！！」

山本「ツナ！！」

タッタ

ツナ「え？ちよっ…なんなのお！？」

バジル「安全な場所へ！！お主に伝えたいことが」

雪「あ、バジル君！！」

フラン「待ってくださいー」

私たちも後を追う

ドカーン

バジル、ツナ「うわあ」

スクアール「ヴオオオオオイ！！もう鬼ごっこは終わりにしようや！！」

ツナ「ああああ…出たあ」

スクアール「で？なんだあ？そいつは」

バジル（奴は沢田殿を知らなかったのか！？…しまった、此処はやり過ぎすべきだった…）

ツナ「あああ…あああ」

スクアーロ「ふん…そろそろ教えて貰おうか!!」

スクアーロが剣を振り上げると

ツナ「わああああああ」

ツナの情けない声が響いた

雪「情けないよ？ツナ君!!」

バジル「ぐっ…」

バキィ

バジル「うわああ」

雪「バジル君!!」

モフ

雪「……あ」

フランがバジル君を助けた…

今度は雲で…

ツナ「ホッ」

スクアール「ヴォオイ……」

ツナ「えっ!?!」

スクアール「そうだ…貴様だ」

ツナ「ああ」

スクアール「この餓鬼とはどういう関係だあ?ゲロツちまわねえとお…お前を斬るぜ!?!」

ツナ「うわあああ!!そんな!!えっと!!あの!!」

シュウウウ

ダイナマイトが頭上にあります

タッ

ドカーン

それをスクアールがジャンプで避けました

タッ

ドカーン

見事な壁ジャンプ…さすがヴァリアー

スクアール「なんだあ!!!?」

獄寺「その方に手を上げてみる?ただじゃおかねえぞ!!」

山本「まっ、そんなとこだ!相手になるぜ!!」

雪、ツナ「獄寺君!!山本君/山本!!」

山本「持ってきてきてねえのに、何故か俺のバットが立てかけてあつてな!ハハハハハ」

ツナ(リボーンの仕業だ!絶対)

スタツ

スクアールが降りてきた

スクアール「てめえらも関係あんのかあ?ウオオオオイ!よくわかんねえが!つだけ確かな事を教えてやるぜえ!俺に盾突くと!死ぬぜえ!」

獄寺「その言葉、そのまま返すぜ!」

雪「殺ってみなきゃ分からないよ?」

フラン「その通りです!」

山本「ありゃあ剣だろ!俺から行くぜ!!」

雪「.....」

フラン（今の山本じゃあ…絶対勝てませんー…あのロン毛…出来ま  
すー）

バジル「止めて下さい！！お主等の勝てる相手ではありません！！」

雪「その通りよ…」

獄寺、山本「ん？」

ツナ「そんなあ…」

バジル「相手が悪すぎます…」

ツナ「ああ…やっぱりやばいよ…」

霰「いい加減アタシにも暴れさせるー！！」

雪「えっちょ」

その瞬間…私の目の色が変わり、青から赤の目になった

雪が霰状態の時は普通に霰って表示しますb y作者

霰「ふん…山本…ここはアタシに任せな」

山本「え？おい」

一同・フラン、霰（雰囲気…変わった？）

フラン「霰…」

アタシがナイフを構えると

ツナ「ええ！？雪ちゃんの武器って扇じゃなかったけ」

スクアード「ヴォオオイ！！お前もナイフ使いか！！」

霰「そうだったね…アンタの所にもナイフ使いがいたね」

フラン「霰…無理はしないで下さいよ…」

霰「分かってるよ」

ポッ

アタシの武器に炎を燈した

雲の炎と雪の炎を

ツナ「紫と…白い死ぬ気の炎？」

霰「当たり！！」

シュッ

ナイフを投げた

フラン「あちゃー…霰…あれ程雪にみんなの前では使っなくなって言われてましたのにー」

スクアール「ヴォオイ…一本だけ投げても意味ねえぞ!!」

ポツ

バババババ

スクアール「だとお!?!」

ツナ「増えた!?!」

スクアール「くっ…幻術かあ!?!」

霰「外れ 全部実態…それだけじゃないし」

スクアール「だとお!?!」

獄寺「なっ!?!ナイフが通った後が凍ってる…」

リボン「二重の雪姫の本領発揮だな」

ツナ「リボン!!」

リボン「通りすがりの植木人間だぞ」

ツナ「植木人間が通りかかるかよ!!今まで何処にいたんだよ!!」

リボン「俺もいろいろあったんだぞ…京子達を非難させたり、このコスプレを押し入れから引っ張り出してきたり…」

ツナ「コスプレはしなくていいよ!!」

スクアール「ヴォオオイ…お前、二重の雪姫と、言ったな…」

霰「だつたら？」

スクアール「お前は偽者だあ!!」

霰「はっ!？」

フラン「何言ってるんですかー!?!現に二重人格じゃないですかー!?!」

霰「そうだ!!」

スクアール「ほう…お前が噂に聞いた嘘吐き姫か？」

霰「そんな訳…ないじゃん」

フラン「そうですー!!」

スクアール「あん？」

霰/雪「嫌…嫌…いやああああああ」

こうしてアタシの意識は手放した…

フラン side

フラン「雪!!」

雪が倒れましたー……………

フラン「っ…」（睨）

スクアール「なんだったんだあ？」

バジル「沢田殿、逃げてください」

ツナ「えっ！？でも…！」

バジル「早く…！」

山本「俺が時間稼ぎするぜ」

ダッ

カキン

スクアール「ヴォオイ…お前、剣技習得してねえな!？」

山本「だったらなんだ…！」

スクアール「軽いぞお…！」

ガキン

山本「うわっ…！」

獄寺「次は俺だ…！果てる…！」

スクアーロ「ヴォオイ!!」

シュシュシュシュ

獄寺「何ッ!?ぐわっ」

ツナ「獄寺君!!山本!!」

バジル「早くお逃げください!!ぐわっ」

ツナ「あっ!!君!!」

リボーン「お前も死ぬ気になれ!!」

バキューン

次回へ続く

標的④ ヴァリアー来る(後書き)

次回…ヴァリアー来る 続

## 標的5 ヴァリアー来る 続(前書き)

前回ちょっと長引いたので…延長戦です

## 標的五 ヴァリアー来る 続

引き続きフラン side

リボーン「死ぬ気になれ」

バキユーン

死ぬ気ツナは死ツナと表記しますBY作者

死ツナ「リ・ボーン!!!死ぬ気でロン毛を倒す!!!」

そう言うってツナはスクアアロに攻撃を仕掛けたがそれをスクアアロに受けとめられましたー

スクアアロ(ヴォオイ:なんてこった:死ぬ気の炎にこのグローブのエンブレムは:)

スクアアロ「まさかお前:噂に聞いた日本の:そうか!!!あいつはお前と接触する為に:」

バジル「うう:」

スクアアロ「ますます貴様ら何を企んでんだあ?死んでも吐いて貰うぞお!!!おらあ!!!」

あー:煩いですねー

死ツナ「うおおおおおおお!!!」

ツナはスクアール口にパンチを繰り出しましたー

ガシッ

そのパンチをスクアール口は受け止めましたー

スクアール口「ニヤリ」ヴオオオイ…弱いぞお!!」

ブンッ

そして、スクアール口は剣でツナをふっ飛ばしましたー

フラン「ツナ!!」

こうなる事は予想してましたけどー…

死ツナ「ゲアッ」

フラン「クッ…」

ミーは壁にぶつかるのをなんとか受け止めましたー

ドサッ

フラン「フウ…」

リボーン「死ぬ気弾じゃ、刃がたたねえか…本当は小言弾でハイパーな死ぬ気モードにしてえとこだが、あれを使うとツナは二週間筋肉痛で動けなくなるからな…」

フラン「え〜…」

死ツナ「どりゃー!!うおおお!!まだだあ!!」

そう言ってツナはスクアールに向かって走り出しましたが…

スクアール「おりゃー!!」

ドガン

ツナが振り返ちに遭いました…

死ツナ「うわああ!!」

またこっちに…

ドカツ

フラン「イデッ」

ドサッ

死ツナ「どりゃあ!!」

シュウウ

フラン「あっ…時間切れですねー…」

ツナ「ハッ）や、ヤバイ…ひいいい」

フラン「ダメツナどこ行くんですかー!?!」

スクアール「ヴオオオイ…何時まで逃げる気だあ?」

ツナ「ああ…」

スクアール「腰抜けがあ!?!」

シュパ

剣に仕込んである火薬がツナを襲いますー!?!

ヤバイですー!?!

ツナ「うわああああ!?!」

フラン「間に合わない!?!」

シュルルル

ドドドドカーン

これは…バジルのブーメランですー

スクアール「ちっ」

バジル「はあ、はあ」

フラン（ホッ）

ツナ「あ、ありがとう…」

フラン「バジル…ナイスです…グッジョブ」

ツナ「君、大丈夫なの？」

バジル「拙者は、バジルと申します…親方様に頼まれて、沢田殿にある物を届けに来たのです」

ツナ「はあ？俺に！？つうか親方様って？」

バジル「これです…」

そういうと、バジルはハーフボンゴレリングを出しました…家光によると、偽物らしいですけどー

ツナ「何？これ？」

バジル「何かは、リボンさん、吹雪殿、フラン殿が知ってます」

ツナ「えっ！？リボンと、雪ちゃん、フランのことを知ってるの！？」

バジル「リボンさんは訳あって戦えません！！」

フラン「ミーも…です…九代目に許可を貰わないと…行けません…雪も本当は手出し出来なかったんですけど…傷付けてないから…ざりOKなんです…」

バジル「これを持って逃げてください!!」

ツナ「ちょっ…急にそんなこと言われても…」

ドガン

ツナ、バジル「うわっ」

フラン「よっと」

ミーは間一髪避けましたー

スクアール「ヴオオイ!!そう言うことかあ!!こいつは見逃せな  
いー大事じゃねえか!!貴様等を片付けて、そいつは持ち帰らねえ  
とな!!」

バジル「くそっ…」

ツナ「ちょっ…何なの?どうなってんの?」

リボン「やべえな…」

スクアール「ヴオオイ…それ渡す前にどう片付けてほしい?」

バジル「渡してはいけません!!沢田殿!!」

ツナ「だ、だけど…」

ツナ(獄寺君も…山本も…雪ちゃんも…死ぬ気弾も敵わないのに…)

「……?」相変わらずだな……」

ツナ「えっ!?!」

フラン「あの声は……」

「……?」スペルビ」

ツナ「あっ!?!」

「……?」スクアアロ」

ディーノ「子供相手にムキになって……恥ずかしくねえのか?」

ツナ「ディ……ディーノさん……」

フラン「跳ね馬!?!」

続く

標的**五** ヴァリアー来る 続(後書き)

次回…ボンゴレリング七七

標的六 ボンゴレセツ(前書き)

今回も長引くかも

## 標的六 ボンゴレ七つ

フランクside

ディーノ「子供相手にムキになって、恥ずかしくねえの?」

ツナ「ディ…ディーノさん!!」

フランク「跳ね馬!!」

スクアール（跳ね馬ディーノ…くっ…この餓鬼はキャバンローネにこねを持っていやがるのか…）

ディーノ「その趣味の悪い遊びをやめねえって言うなら…俺が、相手になるぜ」

スクアール（跳ね馬を相手にすると…一筋縄じゃいかねえか…）

スクアール「ふっ…ヴォオオオイ!!跳ね馬!!お前をここでぶっ倒すのも悪くない…だが!!同盟ファミリーと殺り合ったとなると…上がうるせえ!!今日の所は大人しく帰る!!わきゃねえぞお!!」

ツナ「うわぁ!!」

フランク「ツナ!!」

くっ…スクアールがツナの頭を持ち上げました!!

スクアール「ははははは!!」

ディーノ「ツナを離せ!!」

スクアール「はっ!!」

跳ね馬が鞭を振るってスクアールが火薬を放ちました

トドトド

ディーノ「うっ…ツ、ツナ!!」

タタタ

跳ね馬がツナの上に駆け寄りました

ディーノ「お前達、大丈夫か？」

ツナ「な、なんとか…」

スクアール「相変わらず、あめえな!!跳ね馬!!」

ツナ「えっ!？」

スクアール「今回は貴様に免じてこいつ等の命は預けといてやる…だが…こいつは頂いていくぜえ!!ウオオオイ!!」

ディーノ「なっ!？」

バジル「ああ！！ボンゴレリングが！！」

ツナ「えっ？ボンゴレリング？」

スクアーロ「ははっ！！じゃあな！！」

バジル「ま、待て！！」

フラン「あ、バジル！！」

バジル「うう……」

ディーノ「おい！！無茶すんな……」

フラン「そうですよー……」

リボーン「深追いは、禁物だぞ……」

ツナ「リボーン！！なんで今頃出てくんだよ……」

フラン「っていつか何時の間に着替えたんですかー？」

ツナ「なんで今頃出てくんだよ！！どうして助けてくれなかったんだ！？」

リボーン「俺は…奴に攻撃しちやいけねえ事になってるから……」

ツナ「なんでだよ！！」

リボーン「奴も…V（フラン）ボンゴレファミリーだからですー……」



獄寺「申し訳ありません…次に会ったら必ず奴を倒して見せます！  
」

山本「まだ、その辺りにいるんじゃないか!？」

フラン「少し…静かにしといてもらえます?」

獄寺「えっ!？」

スウー

リボーン「フラン…力を使うのか…」

ミーは幻術を解きましたー

駄作者が書くの忘れてましたけどー…雪も幻術が解けて赤ん坊の姿  
ですよー

フラン『癒しの虹』  
アルコバレーノ・コンフォルト

ポワワア

獄寺「傷が!！」

山本「癒えてく…」

フラン「ふう…雪達はなんとかになりましたけどー、バジルは早く病  
院に連れてった方がいいですー」

ディーノ「あ、ああ!！」

リボーン「あ、そうそう…お前等は帰っていいぞ」

獄寺「リ…リボーンさん…!!」

リボーン「さっきの戦いで分かっただろ？今のお前等の戦闘レベルじゃ、返って足で纏いになるだけだ…」

山本、獄寺「うっ…」

ツナ「リボーン…！何言ってるんだよ…！」

リボーン「行くぞ…ツナ」

レオンをロープにしてツナを捕まえましたー

ツナ「えっ！？うわああ…！ちょっとちょっと」

フラン「あ、待ってくださいー」

ミーも雪を背負ってリボーンの後を追いますー

ツナ「おい…！リボーン…！」

リボーン「本当は…」

ツナ「えっ！？」

リボーン「あいつらも…感じている筈だ…」

ツナ「えっ」

リボーン「あれだけ一方的にコテンパンにされて腸はらわたが煮え繰り返ってねえ筈がねえ」

ツナ「あっ……」

リボーン「今はほっとけ……」

中山外科病院 細かい……

デイーノ「バジルはどうだ？……ロマーリオ」

ロマーリオ「命に別状はねえ……フランの力が作用してるみてえだ」

ツナ「……あの……で、彼、何者なの？やっぱりボンゴレファミリーの人なんですか？」

デイーノ「嫌……こいつはV（フラン）ボンゴレじゃありませんよー」  
被せるなよ……だが、一つ確実に言える事はこいつは……T（フラン）  
ツナの味方ですよー」だから被せるな！！」

ツナ「はあ！？どうなってるの！？ボンゴレが敵で、そうでない人が味方って……つうか別に俺、敵とか味方とか、ありませんから！！」

デイーノ「それがなあ……ツナ……そうも言ってもらえねえみたいだぜ」

リボーン「あのリングが動き出したからな……」

ツナ「リング？そういえばこの子も言ってた……ボンゴレリングとか



ディーノ「こつちのが本物だ」

ツナ「じゃあさっきのは……」

ディーノ「この為に来たんだ……ある人物からこれをお前に渡すように頼まれてな……」

ツナ「お、俺に!?なんで俺なの!?そんな怖いリンググ!!」

ディーノ「そりゃあ、お前がボンゴレの十代目のK（ツナ）ストップ!ストップ!ストップ!!」

ツナ「俺、家に帰って補習の勉強をしなきゃ……頑張ろう……」

ディーノ「あ、おい!!ツナ!!」

ツナ「じゃあ……ディーノさん……また!!」

バタン

リボーン「ツナの奴……それはそうと、フラン……」

フラン「ん?」

リボーン「ツナの奴も行った事だし……雪のこと……教えてくれねえか?」

フラン「えー……嫌ですよー」

リボーン「俺達は誰にも言わねえし、あいつをのけ者にしない……」

フラン「……………分かりましたー」

フラン「雪は…転生者ですー」

ディーノ「転生者？」

リボーン「すると…一回死んだけど…前世の記憶を持って生まれてくるってことか？」

フラン「しかも…パラレルワールドから転生してきた子なんですー」

ディーノ「パラレルワールド？」

リボーン「もしもの世界…つうことか…」

フラン「はいー…しかも、リボーン達の事が漫画やアニメになる世界みたいですよー…だから先の事が分かるんですよー…最もミーはリボーンの漫画やアニメには出てるみたいですけどー虹の波動やこの時代でこの年になってる時点でイレギュラーみたいですけどー」

リボーン「そうか…」

フラン「あの時叫んだのはトラウマの所為みたいですよー」

ディーノ「トラウマ？」

フラン「転生前…姉妹揃って嵌められて虐められてたんですよー」

ディーノ「姉妹？」

フラン「はいー…転生前、雪より先に他界した姉、霰がいたんですよー…事故死って聞いていますー  
…霰が事故死して以来、雪が寂しさで作ったもう一人の人格…霰が生まれましたー」

リボーン「成る程な…」

フラン「誤解はなんだかんで解けて、転生前はクラスのみんなど仲良くして、いじめっ子は自殺しましたー」

リボーン「ほう…」

フラン「あ、因みに虐められてた時に言われていたのが嘔吐き姫、嘔吐き姉妹だったそうですー」

リボーン「…！？それってスクアーロが言ったことじゃねえか…」

フラン「…だからトラウマの所為だって言ったでしょー？因みに雪と虹の守護者はイレギュラーだと思いますよー？雪が言うに本来虹と雪の属性は無いらしいですからー」

ディーノ「…そのいじめっ子…たしか死んでるんだよな？」

フラン「はいー」

ディーノ「俺の予測が正しければ…転生中に紛れ込んだのかもしれないえ…なんせ嵌める程…ずる賢い奴だからな…」

フラン「ミーもそう思いますー…雪が言うに可愛い系と美人系なん

ですからヴァリアーもすぐに信じると、ミ・は思いますー」

ディーノ「えっ！？虐めてたのは二人なのか!？」

フラン「雪と同じ…双子らしいですー」

リボーン「マジか…」

フラン「転生前は頭も良かったですし、性格もいいし、スポーツ万能ですしオマケに顔も良いから多分嫉妬されたんでしょーね…」

リボーン「だが、雪と虹は結構貴重な波動だぞ？」

フラン「多分…嘘を吐いてるか、転生する時に何らかの影響で体質変化したか…ですねー」

リボーン「今回は多分…ヴァリアーと戦う事になる…雪は大丈夫なのか？」

フラン「…あいつ等と戦う時、多分暴走し兼ねないですねー…なんせ相手はいじめっ子の上に二重人格は精神的に保つのが大変なんですー…」

リボーン「そうか…」

続く

標的六 ボンゴレセつ(後書き)

次回…ボンゴレセつ 続

標的七 ポンゴレ七つ(前書き)

思ったとおり長くなった

## 標的七 ボンゴレセツ

フランside

リボーン「そうだったのか…それとも一つ…聞きたいことがある」

フラン「はいー？」

リボーン「あの炎はなんだ？」

フラン「はいー…こっちの方は雪に許可を貰ってるので話せますー」

フラン「あの炎は死ぬ気の炎…さっき雪が出したのは雪と雲の炎…多分大して傷がないのに倒れたのは死ぬ気の炎の出しすぎでしょー」

ディーノ「どういうことだ？」

フラン「元々死ぬ気の炎は誰でも体内に流れている言わば血の様な物なんですー…血を流し過ぎると貧血になるでしょー？それで倒れたんですよー…勿論精神的なダメージもありましたがー…」

リボーン「成る程な…」

ガサゴソ

フラン「こつこつというリングから覚悟を炎にして死ぬ気の炎の完成ですー」

ボツ

ミーはリングを出して霧の炎を出しましたー

フラン「勿論ボンゴリングも死ぬ気の炎が出ますよー…因みに属性ごとに色があって大空はオレンジ、晴は黄色、嵐は赤、雨は青、雲は紫、雷は緑、霧は藍色、虹は七色、雪は白なんですよー」

リボーン「雪の属性は一つの波動以外にも持つことは可能か？」

フラン「まあ、希少ですけどねー…ミー達は大空の七属性全部を持っていますよー」

ディーノ「マジか!!」

フラン「マジですよー…因みにこの炎は武器にも燈すことが可能ですー…」

リボーン「そういえば雪のナイフが増殖したが…あれは？」

フラン「あれは雲の炎の特性の『増殖』ですよー…地面が凍ったのは雪の特性『凍結』ですよー」

ディーノ「特性？」

フラン「はい…死ぬ気の炎はそれぞれに特性があるんですよー…大空は調和、晴は活性、嵐は分解、雨は鎮静、雲は増殖、雷は硬化、霧は構築、虹は癒しと具現、雪は凍結と守りですよー…その内これ等の属性を生かした武器が出来ますよー」

リボーン「そうか…分かった…もう帰っていいぞ」

フラン「失礼しますー」

リボーン「あ、忘れ物だ!!」

ポイ

フラン「ん？」

パシッ

フラン「雪と…虹のボンゴレリング…」

リボーン（ニッ）

フラン「…これ持っているとヴァリアーに攻撃していいんですねー？」

リボーン「ああ、九代目の許可が下りた事になるからな」

フラン「はぁ）…本当に失礼しますー」

バタン

フラン「しかし…ツナ…まだ自分の立場から逃げられると思ってるんですかねー？」

それに…バジルも囿でしたし…多分…バジルにもバジルが囿だつて事を知らされてないらしいですし…

ツナの家の前

ん？

洗濯物がいっぱいですねー…多分家光が帰ってきたんですねー

夜

自宅

フラン「はあ…今日は最悪ですー…デートに行ったらリボンに邪魔されるし、ヴァリアーのスペルビ・スクアーロが来るし…雪は今日一日中寝たままだし…今日はバタバタしすぎですー」

多分、ザンザスの超直感でフェイクもすぐ見破られると思いますー

フラン「はあ…でも…凄く…嫌な予感がしますー…もしかしたら…

雪「皆さんは…信じてくれますよねー？」

朝

雪 side

雪「ん？朝？確か…あの時…思い出したくも無い！！フラン…嫌な予感がする…ん？ボンゴレ…リング？」

朝起きたら私の首に雪のボンゴレリングがかかっていた

雪「これが…雪のボンゴレリング…か」

フラン「ん？ゆ…き？雪！！」

雪「フラン、お早う…」

フラン「大丈夫ですかー?!」

雪「うん…ちょっとした貧血だったけど…もう大丈夫!」

フラン「よかったですー…」

雪「じゃあ早く起きちゃったしバジル君のお見舞いにも行く?」

フラン「はいー、行きますー」

中山外科病院

ガララ

雪「デーノ、いる?」

フラン「跳ね馬ーいますかー?」

山本「雪、フラン」

獄寺「雪!!フラン!!」

ツナ「大丈夫なの?雪ちゃん」

雪「平気平気」

フラン「ツナは分かりますけどー、なんで山獄までいるんですかー」

「？」

獄寺「セットで呼ぶの…止める」

山本「…？」

獄寺「キャバンローネの奴に聞いたんだ」

山本「そういえば今朝、妙なことがあってさ」

獄寺「そうなんすよ」

へー…今からツナ君にリングを見せる所に私たちが入ってきたのね…

山本「今朝、新聞を取ろうとポストを開いたらこんな物が入ってたんだ」

獄寺「俺のところにもこれが…」

フラン「ミーは昨日、リボーンに渡されましたー」

雪「私のはフランに寝てる間首に下げられた…」

フラン「だってそこら辺に置いとくと無くしそうですからねー」

獄寺「もしかして…昨日の奴絡みかと思ひまして…」

ツナ「わああああ！！そのリングってまさかあー！！」

山本「これ、なんだか知ってんのか？ツナ」

ツナ「ヤバイって！！これ持っていると狙われるんだよ！！」

山本「そうなのかなぁ…」

獄寺「やっぱ、十代目も持ってるんですね！！」

フラン「そりゃあ十代目時期ボスですからねー」

ツナ「つつか…なんで四人の所にも!？」

雪「ツナの周りでもいい守護者が私達しかいなかったから?」

フラン「まあ、雪と虹の波動は希少ですからねー」

ディーノ「こいつ等も選ばれたからだ…」

ツナ「ディーノさん…リボーンも!!」

リボーン「ボンゴレリングは全部で九つあるんだ…そしてそれを九人のファミリアが持って、初めて意味を持つ物だからな…」

ツナ「九人のファミリア?」

リボーン「お前以外の八つのリングは時期ボンゴレボス、沢田綱吉を守護するに相応しい八名に届けられたぞ」

続く

標的七 ポンゴレ七つ(後書き)

次回…カテキヨー、動く

標的八 カテキョー、動く 転入生、来る

雪 side

リボン「そのリングはボンゴレ後継者である証だ

ツナ「ちよっ…勝手に決めるなよ!! 大体そんなヤバイ話しに皆を巻き込むなんて!!」

獄寺「在り難き幸せです!!」

ツナ「え？」

獄寺「身の引き締まる思い…頑張りましょう!! 十代目!!」

獄寺君が…キラキラしてる…

ツナ(この人…喜んでるよ…)

リボン「獄寺のリングは…嵐のリング…山本のは雨のリング…フ  
ランのは虹のリング…雪のは雪のリングだな」

獄寺「そっぴや…俺のと違うな…」

山本「ん? そうか？」

雪「違うよ…」

ツナ「なんなんだよ…嵐とか、雨とか…天気予報じゃあるまいし…」

リボーン「初代ボンゴレには個性豊かなメンバーが揃っててな…その特徴が、リングにも刻まれてるんだ…初代ボスは全てに染まりつつ、全てを飲み込み法要する、大空の様だったといわれる…故にリングは大空のリングだ…」

リボーン「そして…守護者となる部下達は大空を染め上げる…様々な天候になぞらえたんだ…」

全てを洗い流す恵みの村雨…雨のリング

荒々しく吹き荒れる疾風…嵐のリング

何者にも囚われずわが道を行く浮雲…雲のリング

実態の掴めぬ幻影…霧のリング

明るく大空を照らす日輪…晴のリング

激しい一撃を秘めた雷電…雷のリング

大空と様々の天候の架け橋となる…虹のリング

優しく降り積もる…雪のリング

…つつてもお前達の持つてるリングだけじゃまだ（ツナ「ストップ

！！」なんだ？」

ツナ「兎に角！！俺はいらなから！！皆だつてねっ？ねっ？」

山本「ああ…わりいんだけどさ、俺も野球やるからさ、指輪は付けねえな…話し、よく分かんねえし…」

ツナ「だよね、だよね！！こんな持ってたら昨日のロン毛がまた狙って来るんだから！！」

雪「ツナ君…墓穴掘ったわよ…」

ツナ「え？」

山本「あいつ…来んのか？」

ツナ「うん、ヤバいでしょ」

はあ…墓穴を掘り続けてるよ…ツナ君…

ツナ「しかも下手したら十日でだよ？」

山本「十日か…」

ツナ「あれ？ど、どうしたの？」

山本「…これ、俺んだよな？やっぱ貰ったくわ…」

ツナ「え？」

山本「負けたまんまじゃいらねえたちみてえだな…！俺…！」

タッタッタ

ガラガラ

山本君が走り出して外に出る

ツナ「や、山本！？」

獄寺「俺も十日でこのリングに恥じない男に生まれ変わってみせませ…！」

ツナ「ちよつ…獄寺君まで…な、なんで…？」

ディーノ「やったなツナ！！お前の言葉で獄寺と山本は鍛える気満々になったみたいだぜ」

フラン「部下をやる気にするなんて…ボスに必要なことですよー…グツジョブ」

ツナ「俺はそんなつもりじゃ…シャレになんないって…！」

リボーン「樂觀は禁物だぞ」

ツナ「ん？お前何やってんだ…！」

なんか着替え始めてる…

リボーン「後十日で残り四人の守護者も鍛えておかねえと勝ち目はないからな…」

ツナ「誰なんだよ…残りの四人って…」

リボーン「どいつも、お前がよく知ってる人物だ…因みに晴のリングを持った奴がもうすぐ此処に来るぞ」

ツナ「え？晴のリングって…」

リボーン「よし」と

パオパオ老子の格好…

ツナ「その格好つてま、まさか!!」

フラン「…象ですかー？」

????「パオパオ老子!!」

バーン

了平「俺を鍛えなおしてくれるとは、真まことか!!」

ツナ「きよ、京子ちゃんのお兄さん!？」

了平「よお!! 沢田!! お前も一緒に特訓を受けるのか!! 楽しみだな!!」

フラン「うわぁ…暑苦しい人が来たよ…」

ツナ「ま、待つてください!! お兄さん!! 状況分かってるんですか!？」

了平「敵を向かえ討つのだろう? 相当緊迫してるらしいな!! 昨日の出来事も、十日後のことも!! 指輪の話しも聞いたぞ!!」

ツナ「えっ!?! じゃあ分かってて…」

了平「全部忘れたけどな!!」

ズーン

ツナ「なんで寄りによって…!! 京子ちゃんが心配するだろ!!」

リボン「こいつには…ファミリーには欠かせない重要な役割があるからな…」

ツナ「え？重要な？」

了平「極限任せろお！！」

ツナ、雪（確かに晴だよ…）

了平「所でパオパオ老子…今日は俺の為に幼馴染を呼んでいただいたとか…」

え？幼馴染？

ツナ「え？幼馴染？」

ピカーン

雪、フラン「おしゃぶりが…」

リボン「つうか、腐れ縁だぞ…来たな」

ツナ「おしゃぶりが光ったって言うことは…アルコバレーノの  
バサツバサツ

????「久しぶりだな、コラッ」

ツナ「コロネロ！！」

雪「確かに、コロネロとはアルコバレーノになって以来腐れ縁だね…」

ゲシッ

ツナ「うわっ」

コロネロ「元気そうだな！！コラッ」

雪「相変わらずラル譲りのスパルタね…」

ツナ「な、なんでコロネロが此処に…」

コロネロ「リボーンが泣き付いてきたからな…」

リボーン「泣いてねえぞ…」

ガン

頭突き…

コロネロ「素直に泣け！！コラッ」

リボーン「誰が泣くか！！」

ガン

コロネロ「コラッ」

リボーン「泣くか!!」

ツナ「そんな事やってないで…ちゃんと説明しろって…どういうことだよ!!」

シユウ

頭突きしすぎで…額から煙が出てる…

リボーン「今回は、時間がねえから俺一人じゃ全員を、鍛えられないんだ…」

コロネロ「だから、俺達が専属の家庭教師になってやるんだ!!」  
ラッ

リボーン「リングを持つ奴、それぞれにな」

ツナ「家庭教師？」

コロネロ「ふむ…話しにあったボクサー小僧はどいつだ？」  
ラッ

了平「俺だ!!」

コロネロ「ん？」

スタスタ

コロネロが了平さんに近づいて

コロネロ「どれ…」

ガチャ

ショットガンで了平さんの筋肉を調べ始めた

コロネロ「むっ…こいつ…そんなに弱いのか？コラッ」

リポーン「ああ、選ばれたファミリーの中でも最弱の部類だな」

コロネロ「ぶぶ…面白い奴を見つけたぞ…コラッ…もし十日間、俺のトレーニングに着いてこれればほかの六人なんてぶち抜けるぜ！  
！コラッ…その代わり厳しいぜ？やるか？」

スッ

コロネロは自分とお揃いのバンダナを了平さんに差し出した

了平「望む所だ！！」

シュル

了平さんはバンダナを巻きました

了平「俺は負けん！！」

コロネロ「よし、着いて来い！！コラッ」

バサッバサッ

ファルコに捕まれてコロネロは外に飛び出した

了平「おう!!」

了平さんはその後を追いました

ツナ「だ、大丈夫なのか？あの二人？」

リボーン「心配すんな…コロネロは何千という生徒を見てきたんだ…そのコロネロを唸らせたという事は…上手くいけば了平は、何倍も強くなるぞ」

デイーノ「じゃ、俺も鍛えに行つて来るぜ」

ツナ「デイーノさんも家庭教師！？一緒に戦つてくれるんじゃない？」

デイーノ「さすがに今回の件は…同盟の問題で、俺は手を出せねえんだ…」

ツナ「そんなあ!!頼りにしてたのに!!」

デイーノ「悪いなツナ、今やってやれるのはこれくらいしかねえんだ…」

ツナ「…じゃあもしかして獄寺君と山本のカテキョーに？」

デイーノ「いや、俺は別の問題児らしいぜ？」

リボーン「心配すんな、獄寺と山本は自分でピッタリな家庭教師を見つける筈だ」

ツナ「え？じゃあ…」

そして通学路

雪「私たちは自修練だよね？」

フラン「そんなところ…ですかねー？」

雪「ところでなんで私達、学校に向かっているの？」

フラン「そりゃあ、ミー達は毎夜の事を殺つてれば自然に鍛えられる…から学校休んでまで特訓する必要ないでしょー？」

雪「…確かにね」

フラン「ぶつちやけ面倒いですしー」

雪「それが本音！？千種みたいなこと言わないの」

教室

雪「お早う」

フラン「おはよーございますー」

京子「あ、雪ちゃん、フラン君、お早う」

花「京子から昨日のこと聞いたよ？大丈夫だった？」

雪「うん、大丈夫だよ^^」

京子「…所で今日、転校生が来るの」

フラン「そうなんですかー」

雪「仲良くなれるかな？」

キーンコーンカーンコーン

先生「座れ！！知ってる奴もいると思うが今日は転校生が来る、入って来い！！」

?????1、?????2「はあいVV」

雪ソクッ

?????1「姫花はあ、雪虹 姫花あ、よろしくねえ」

?????2「姫奈はあ、雪虹 姫奈あ、双子の姉ですう、よろしくねえ」

フラン「なんですかー？見た目はいい感じですがー、めっちゃくちゃ香水臭いですしー、ぶりっ子じゃないですかー…雪？」

雪ガタガタ

フラン（もしかして…昨日の予想…ズバリでしたかー？）

スタスタ

姫花「後で視聴覚室に笹川京子と着なさい…来なかったら…分かるわね？」

雪（！?）

フラン（めちゃくちやベタな手で来ましたかー…）

昼休み

雪「行かなきゃ…」

京子「うん、そうだね…」

雪「京子ちゃんには行かなくていいよ？嫌われるかもしれないし…」

京子「大丈夫だよ^^」

雪「そう?」

フラン「黒川さんー、後を着いていきましょー?」

花「あ、ええ…」

視聴覚室

ガラ

雪「……………」

姫花「雪ちゃん、京子ちゃん!!あんだ達、生意気なのよ!!」

姫奈「そうよ！だから…嫌われちゃって？」

京子「え？」

雪（ガタガタブルブル

スッ

姫奈はカッターを…姫花は自分を殴る準備

ザクツ パーン

姫奈、姫花「きゃあああああああ」

バタバタ

クラス「何があつた!？」

姫奈「あのね…笹川さん達が殴つて来たの…」

クラス「最低…転入生を殴るなんて…」

クラス「信じてたのに…」

信じてた?信じてたのはこっちだよ…

クラス「保健室に行こう…」

姫花「うん…有難う」

ゾロゾロ

皆が去っていった後

フラン「…大丈夫ですかー？」

花「…大丈夫？」

???1「何があつたー!!」

???2「…」

フラン「跳ね馬…雲雀さん…」

京子「えつと…あの…」

雪「…また、嵌められた…」

ディーノ「なにい!？」

雲雀「ふうん…風紀を乱すなんて…いい度胸だね…」

雪「私は…大丈夫…」

続く

標的八 カテキヨ、動く 転入生、来る（後書き）

次回… 虐めと修行

## 標的九 虐めと修行

雪「side」

デイーノ「大丈夫か？」

雪「うん……」

京子「……………」

雪「京子ちゃん……大丈夫？」

京子「うん……」

雪「京子ちゃん……なんで？京子ちゃんは関係無いのに……嫌われるのは私だけで十分だよ！！」

フラン「……きつと二人の可愛さに嫉妬したんですよ……」

京子「雪ちゃん……そんな哀しい事言わないで……二人でがんばろ？」

花「二人じゃないよ！！此処にいるみんな、あんた達の味方だよ！！」

フラン「そうですよー？」

京子「花……」

雪「フラン……」

デイーノ「そういつこった」

雲雀「……………風紀を乱した奴の味方になりたくないからね…風紀を乱した奴…咬み殺す!!」

雪「デイーノさん…雲雀さん」

デイーノ「お前等…そういえば修行とかはどうした？」

雪「えつと、毎夜の事をしてれば大丈夫だから…」

デイーノ「成る程な…」

雪「それに…こんな事になった以上、精神力も鍛えられる…と思うから…」

デイーノ「そうか…」

デイーノ（雪…暗くなってやがる）

雪「そうだ…ツナ達には、言わないで？」

デイーノ「ん？なんでだ？」

雪「修行の邪魔になりたくないから…それがツナ達に嫌われる結果になっても…言わないでほしいの」

デイーノ「……………分かった」

ディーノ（凄い…覚悟の目…）

花「さ、さつきからなんなの？なんの話してるの？」

京子「さ、さあ？」

雪「え、えっと…ほら、ツナ達が休んでるのは相撲大会が近いからそれに向けて猛練習してるから…それで」

ディーノ（幾らなんでもそれは無茶が…）

京子「そうなんだ!!」

ディーノ（ええ！？通じた！？）

フラン（天然っていうかなんというか…）

雪「そ、それで私達も出場するから学校から帰ったら私達も修行するの!!」

京子「そうなんだ!!頑張ってるね!!」

雪「う、うん」

京子「そうだ!!私も行ってるいい？」

雪「え！？危険だよ!？」

京子「いいよね？^言^」

雪「…はい…」

フラン（ヤバイですー…どうしましょー）

ディーノ「修行のヒント、やるうか？」

フラン「はいー」

ディーノ「虹の守護者の使命は全ての守護者をサポートし、守護者の架け橋となる…それが虹の守護者の使命」

フラン「…よく分かりませぬー」

ディーノ「とりあえず帰ったら修行の手助けしてやればいいんじゃないのか？」

フラン「えー、メンドイですー」

ディーノ「まあまあ、そういうな」

雪「私は…？」

ディーノ「雪の守護者の使命はどんなに困難が在ろうとも立ち向かい、ファミリーを援護し、勝利へと導く雪」

雪「…私の課題の一つはまずこれを解決しなきゃいけない…のかな？」

ディーノ「…でも学校帰ってからじゃ少し足りなくなかないか？」

雪「大丈夫だよ^^」

ディーノ「なら…いいけど」

京子「ねえ…本当に何やってるの？」

雪「だからすもゝ(京子様)本当の事話して?^言^」はい…」

フラン「いいんですかー?」

雪「多分…京子ちゃんも巻き込まれると思うから」

フラン「そうですかー」

雪「うん…京子ちゃん、今起きてる事を教える代わりにツナ達には知らないフリをして?」

京子「分かった^^」

私は京子に今起きている事を包み隠さず話した

京子「そんな事が…私に出来ること、無いかな?」

雪「うん…じゃあツナ達が怪我しないようにお守りを作って笑顔で渡して上げて?」

京子「うん、分かった^^」

雪「あ、もうチャイムが鳴る!!行こう?京子ㄝㄝ(京子「京子でいいよ^^」じゃあ京子、花ㄝㄝ(花「私も花でいいよ」花、フラ

ン」

フラン（被せ過ぎて読み難いですねー^^;）

教室

ガラッ

ヒソヒソ

クラス「うわっ来た」

クラス「あんな事しといてなんでこれる訳？」

雪「……………」

京子「大丈夫？」

雪「う、うん」

フラン「無理しなくていいですよー？」

姫花「フランくん、なんで姫花を虐めた奴の味方をするのぉ？」

フラン「そりゃあ、雪虹達が雪達を嵌めたのを見たからに決まってるじゃないですかー」

姫奈「姫奈達はあ、そんなことしないよぉ？」

フラン「勝手に言うててくださいー」

クラス「吹雪、笹川を連れて放課後、体育館裏まで来い」（ボソッ）

雪「いいけど…その代わり京子は連れて行かないよ？」

クラス「っち…まあ、いいだろう…」

放課後

雪「さて…と」

スウー

雪「あいつ等には悪いけど、リング争奪戦が近いから怪我する訳にはいかないんだよね」

私は私の幻覚を作り出して体育館裏に行かせた

フラン「じゃあ取りあえずミーはツナの所に行ってますー」

雪「うん、行こう、京子」

京子「うん」

帰り道

雪「明日、迎えに行くから」

京子「ありがとう、あ、そうだ！！雪、これから私の家に行かない？」

雪「え！？でも…」

京子「だって、修行もまだ決まってるじゃないでしょ？」

雪「う、うん…」

京子「じゃあ私の家で修行内容を考えよ^^」

雪「…分かった」

京子の家

雪「うーん…」

京子「どうしたの？」

雪「どう鍛えようかなあ…と思って…」

京子「そうだね…」

幻術さえあればいいんだけど…自分で作った幻術は役不足だし…

…ん？幻術？

そろそろ犬達、脱獄してるかな？

雪「…じゃあ、取りあえず黒曜に行ってみますか…」

京子「え？黒曜って…」

雪「京子も来る？」

京子「う、うん」

黒曜ヘルシーランド

京子「こ、ここって…廃墟？」

雪「そ、犬達…いれればいいけど…」

????「誰だびよん!!」

雪「犬!!千種!!」

犬「あ、雪だびよん」

千種「…久しぶり」

雪「クローム髑髏っていう女の子いる？」

千種「ふう…クローム…お客…」

クローム「貴女が…雪？」

雪「うん こっちは友達の子京子」

京子「は、はじめまして」

クローム「はじめまして…クローム髑髏…」

京子「わたしは笹川京子、よろしくね」

クローム「…よろしく」

雪「ねえ、クローム、私の特訓手伝って欲しいんだけど…クロームの幻術もパワーアップするし…どう?」

クローム「…分かった…私も…骸様や雪の力になりたい…」

雪「うん、有難う」

京子「私は…どうすれば?」

雪「うーん…取りあえず離れて見てて?」

京子「分かった」

雪「犬や千種も…ね?」

犬「分かったびよん」

千種「…メンドイ」

クローム「…どんな幻覚にすればいい?」

雪「…雪の守護者らしい戦闘フィールド…かな?」

クローム「…分かった」

ビュオオオオオオ

雪「…最初から吹雪はやりすぎ…まあ…いつか」

クローム「行くよ…」

雪「OK」

それから…

雪「ああ…疲れた…」

クローム「大丈夫？」

雪「うん…途中霰がでしゃばって…精神力きたえなきゃ…」

クローム「知能派の雪、力任せの霰…上手く使い分ければいいと思  
う…」

雪「だね…」

京子「お疲れ」

雪「あ、京子…」

京子「大丈夫？」

雪「うん、汗掻いたから早くお風呂入りたい…」

京子「じゃあ帰ろっか」

雪「うん、クローム、犬、千種、また明日」

犬「じゃあな」

千種「また…」

クローム「うん…」

帰り道

京子「じゃあ、またね」

雪「うん、バイバイ」

はあ…マジ疲れた…

有幻覚で少しは寒さに耐性がついたかな？

フラン「あ、雪」

雪「フラン、今帰り？」

フラン「はい…獄寺、間違った修行をして大変でしたよー」

雪「はは…大変だったね」

フラン「雪はどんな修行を？」

雪「クロームを鍛えながら修行…」

フラン「そうなんですかー」

雪「明日は色々な意味で大変だろうな……」

フラン「大丈夫ですよー……ミー達がついてますー」

雪「有難う」

続く

標的九 虐めと修行（後書き）

次回・・・リング争奪戦開始

標的十 リング争奪戦、開始！（前書き）

今回雪達影が薄いけどちゃんといます！！

標的十 リング争奪戦、開始！

雪「side」

数日後

うーん…そろそろ…かな？

あ、因みに今は夕方で家に帰る途中

雪「ん？あれは…」

家光「お、丁度よかった^^」

雪「家光さん…もしかしてレヴィ雷撃隊がランボ君を狙いに？」

家光「お、分かってるなら話しが早い！！今すぐ救援に行ってくれ  
！！！」

雪「はい！！…そういえばフランは？」

家光「もう知らせてある…お前は先回りしてくれ」

雪「了解」

屋根の上

雪「ん？見つけた！！」

私は今屋根の上を移動中

そこからランボ君を発見

ついでに敵も

霰『アタシに変われ!!』

雪「ok」

霰「よつと」

アタシは敵にナイフを投げた

敵「ぐわあ!!」

バタ

霰「子供に手出しするなんて最低だね」

ランボ「グピャ!?!」

フウ太「雪姉!!」

イーピン「雪さん!!」

雪『霰!! 変わって』

霰(ok)

雪「大丈夫だった？」

子供達「うん／はい！！」

雪「よかった…間に合って…」

ザツ

雪（殺気！！…こんな時に傷が…）

ガン

雪「え？」

敵B「グワツ」

バタツ

了平「ボンゴレ晴の守護者にして、コロネロの一番弟子！！笹川了平！！推参！！…大丈夫だったか？」

また殺気！！

シュツ

敵C「グワツ」

バタ

またまた殺気

ドカーン

敵D「ぎゃあ!!」

獄寺「つたく!!なんでアホ牛がリングを…」

山本「もう大丈夫だぜ」

ツナ「み、みんな!!」

雪「…家光さん…間に合った様ね」

フラン「ミーもいますよー」

雪「ツナ君達と一緒にだったんだ…」

フラン「はいー」

ツナ「皆!!」

獄寺「十代目!!」

了平「オッス、沢田」

山本「遅くなつてワリイ」

フウ太「ツナ兄!!怖かったよ」

ツナ「よかった…怪我してない？」

フウ太「うん！！雪姉が助けてくれたから…」

ランボ「ランボさん腹減ったぞ〜ツナ〜オンブツブ」

ツナ「道に寝るなって…汚いなあ…つたく！！狙われたのはお前なんだぞ！！少しは危機感を…ん？」

アフロにリングが引っ掛かってる…

ツナ「お前…こんな所にリング引っ掛けて…ゴミと一緒にじゃん…はあ…」

獄寺「俺には全く理解出来ないっすよ…なんでこんなアホがリングを…」

山本「まあまあ、いいじゃねえか、まずは皆無事って事で」

ツナ「うん…本当に助かったよ…さっきはどうなる事かと…」

了平「しかし…思ったより骨の無い連中だったな…楽勝だぞ」

リポーン「そいつは甘えぞ…こいつ等はヴァリアーの中でも下っ端の連中だ…本当に怖えのは…」

雪「来る…！」

ザッ

レヴィが来た…

レヴィ「…お前達が殺ったのか？…雷のリングを持つ奴は誰だ？そこに  
いるパーマの餓鬼か！！」

ランボ「ウツ」

ツナ「ち、違います！！ご、誤解で…」

レヴィ「邪魔立てすれば…消す！！」

????C「待った…レヴィ」

シユタ シユタ

????B「一人で狩っちゃダメよお」

????C「獲物は仲良く…ししっ」

????D「コオオオ」

????E「事情が変わったよ…どうやら他のリングの所持者もここ  
に…」

ツナ「うわぁ…こんなに」

スクアール「ヴオオオオオイ！！よくも騙してくれたな…カス共」

山本「…！？」

獄寺「あんにゃろっ！！」

スクアール「ヴオオオイ！！雨のリングを持つ奴はどいつだあ？」

山本「俺だ…！！」

スクアール「なんだ、テメエか…三秒…三秒で切り身にしてやる！！」

ツナ「ヤバイ…ヤバイよ！！」

???「…のけ」

リポーン「…出たな…まさかまた奴を見る日がやってくるとはな…  
ザンザス」

ザンザス「沢田綱吉…」

コオオオ

ザンザスが憤怒の炎を出そうとしています

雪「くっ『スノーガード』」

念の為に私は扇を使ってバリアーを張った

ルツス「ボス…まさかいきなりあれをここで！？」

スクアール「俺達まで巻き込む気か！！」

ザンザス「…死ね」

ザクッ

フラン「つるはし……」

????「待て、ザンザス」

雪「家光さん……」

家光「そこまでだ……ここからは俺が仕切らせて貰う」

ツナ「と、父さん!?!」

獄寺「なっ!?!十代目のお父様!?!」

ザンザス「家光……」

スクアール「テメエ!!!何しに」

家光「ザンザス……お前の部下は門外顧問の俺に、剣を向けるのか?」

ツナ「と、父さん……何言ってるの?」

スクアール「今更口出しするんじゃないぞお!!!家光!!!逃げるこ  
としか能の無い腰抜けがあ!!!」

バジル「何を!!!」

家光「待て……バジル……俺は逃げてたんじゃない……九代目からの回答  
を待っていたんだ……俺は近頃のお前達のやり方と、それを容認して

いる九代目に疑問を持つて、意義申し立ての質問状を送っていたんだ…そしてこれがその回答…九代目からの勅命だ」

ツナ「なんの話しだかさっぱり分からないよ！！なんで父さんがそんな事を！！」

リボーン「門外顧問…それがボンゴレでの家光の役職だ…ボンゴレであってボンゴレでない者…普段は部外者でありながらファミリーの非常時になればボスに告ぐ権限を発動出来る実質の？2だ」

ツナ「と、父さんが？2！？」

リボーン「そして、門外顧問は後継者選びに措いて、ボスと対等な決定権を持つ…つまりボンゴレリングを半分にしたハーフボンゴレリングを自分で選んだ後継者に授けられる権利を持つんだ」

ツナ「リングの半分？」

リボーン「言わなかったか？七種類あるハーフボンゴレリングはそれだけではただの欠片に過ぎないんだ…対となる二つが揃って初めて後継者の証のボンゴレリングになるんだぞ」

ツナ「それでこんな変な形なんだ…」

リボーン「逆に言えば二つ揃わなければ後継者にはなれねえんだ…ボスと門外顧問が別々の後継者を選ぶなんて滅多にないけどな」

バジル「これが…九代目からの勅命です」

ツナ「勅命？」

シユル ボツ

ツナ「うわっ…死ぬ気の炎？イタリア語読めないよ！！一体なんて書いてあるの！？」

家光「翻訳するところ書いてある…」今まで自分は後継者に相応しいのは家光の息子、沢田綱吉だと考えてそのように仕向けて来た…だが最近、死期が近い所為か私の直感はやえ渡り、より相応しい後継者を見つけるに至った…我が息子…ザンザスである…彼こそが、時期十代目に相応しい」

ツナ「なっ！？あの人九代目の息子！？」

家光「『だがこの変更に不服な者もいるだろう…現に家光はリングの継承を拒んだ…かと言って私はファミリィ同士の無益な抗争に突入することは望まない…そこで、皆が納得するボンゴレ公認の決闘をここに開始する』…つまりこういっただけ…ボンゴレ後継者候補、沢田綱吉！！同じく後継者候補、ザンザス！！二人が正当な後継者となる為に必要なボンゴレリング…その所有権を争ってツナファミリィとヴァリアアの決闘だ！！」

二人が正当な後継者となるために必要なボンゴレリング…同じ種類のリングを持つ者同士、一対一のガチンコバトルだ！！」

続く

標的十 リング争奪戦、開始！（後書き）

次回…晴の守護者の思い

標的十一 敵であり味方!? 風邪引き雪

雪side

家光「同じ種類のリングを持つ者同士、一対一のガチンコバトルだ  
!!!」

ツナ「ガチンコバトル!?!」

家光「ああ…後は指示を待てと書いてある…」

獄寺「指示?」

ガッツ

チエルベツロ1、2「お待たせしました」

シュタツ

チエルベツロ1「今回のリング争奪戦では、我々がジャッジを務めます」

ツナ「え?だれ?」

チエルベツロ1「我々は九代目直属のチエルベツロ機関の者です」

チエルベツロ2「リング争奪戦に置いて、我々の決定は九代目の決定だと思ってください」

ポオオオ

チエルベツロが死炎印の灯った紙を持つてる…

チエルベツロ1「九代目はこれがファミリー全体を納得させるぎりぎりの措置だと仰っています」

チエルベツロ2「依存はありませんか？ザンザス様？」

ザンザス「……………」

チエルベツロ1「有難うございます」

家光「待て…意義ありだ…チエルベツロ機関など、門外顧問である俺も聞いたことないぞ…そんな連中にボンゴレファミリーの未来を決める重要なジャツジを任せられるか！！」

チエルベツロ1「意義は認められません、我々は九代目に仕えているのであり、貴方の力の及ぶ存在ではない」

家光「何…！！」

ルッスーリア「んまあ…残念ね」

やっぱしオカマだ…

チエルベツロ2「本来、七種類のハーフボンゴレリングは、ボスの持つ一組と門外顧問が持つもう一組が存在し、跡継ぎの式典の際にボスと門外顧問が認めた七名に二組のリングを合体させた完全な形で継承される物なのです…」

チエルベツロ1「ですが、今回異例の事態となつてしまいました」

チエルベツロ2「二人が相応しいと思う七名が食い違いそれぞれが違ふ人物に一方だけを配つたのです

即ち九代目が後継者と認めたザンザス様率いると、門外顧問、家光氏が認めた綱吉氏率いる七名です  
そこで、真にリングが相応しいのか」

チエルベツロ1「命を懸けて証明してもらいます」

ツナ「ええ！？命つて…」

チエルベツロ2「場所は深夜の並盛中学校…詳しくは追つて説明します」

チエルベツロ1「それでは明晩、十一時、並盛中でお待ちしています」

チエルベツロ1、2「さようなら」

シュタ ガサ

チエルベツロが去つていった

ツナ「ちよつ、ちよつと待つて！！そんな！！」

ザンザス「睨」……………」

ツナ「わぁ…うわぁ…！！」

こうしてヴァリアーも去っていった

ツナ「そ、そんなぁ…」

朝

ピポピポピポ（カチ

雪「ん…フアアア」

フラン「おはようございますー」

雪「おふぁよー」

フラン（可愛いですー／＼／＼）

ピンポーン

雪「…？誰だろう…こんな朝っぱらから

ガチャ

…？？？「やぁ

雪「マ、マーモン！？」

フラン「ヴァリアーがなんの用ですかー？（睨」

マーモン「今日は偵察じゃなくて…話しがあるんだ」

雪「は、話し？取りあえず玄関じゃ難だからリビングに」

マーモン「ムム…お邪魔するよ」

リビング

雪「で？話して？」

マーモン「雪虹達の事で話しがあるんだ」

雪「っ！？」

フラン「…（睨）」

マーモン「そんなに睨まないでよ…僕は雪虹達に味方するつもりは無いから…まあ…通り名を出さなかったら信じてたと思うけどね」

雪「さすが…ね」

マーモン「うん…アルコバレーノ舐めないでよね」

フラン「まさか…！！バイパーだったんですかー！？」

マーモン「まあね…それに…君たちの通り名は昔から有名だったからね」

フラン「…そうですかー」

マーモン「僕が今日来たのはあいつ等の情報を持ってきてあげたよ」

雪「…で？いくら？」

マーモン「ムム…今日は特別に無料にしてあげるよ」

雪「ありがとう（ニ）」

マーモン「ムム…／／／」

フラン「ムツ）マーモンさん、雪虹達の情報を教えてくださいー」

マーモン「ムム…あいつ等の本当の通り名と武器を教えに来たんだ…」

雪「通り名があつたんだ…」

マーモン「姫花の通り名は魅惑の傘使い…武器は仕込み傘、ヴァリアー虹の守護者だよ」

仕込み傘…そういえば姫花は銀の威の事好きだったな…何故虐めっ子の好きな物を知ってる！？by作者

マーモン「姫奈の通り名は雪の鞭使い…武器は鞭…雪の守護者だよ」

姫奈はディーノさんの事好きだからね…

マーモン「今日は学校は？」

雪「もちろん…行く…よ」

バタ

フラン「side」

フラン「雪!？」

大変ですー

雪が倒れましたー

フラン「…熱がありますー」

マーモン「ムム…今日は学校休みなよ…晴の守護者の妹僕が幻覚で守ってるから」

フラン「…有難うございますー」

っていつかなんで笹川さんが虐められてるって知ってるんですかー？

マーモン「ヴァリアークオリティーだよ」

フラン「読心術ですかー!？」

マーモン「口に出たよ…」

フラン「マジですかー」

マーモン「じゃあ僕は行くよ」

フラン「さようならー」

バイパーが去っていった

フラン「えっと…まずは体温を測りましょー」

ピピピピ

フラン「えっと…38度5分…はあ…二三日安静ですなー…その間、ミー達の番にならないければいいですがー…」

夜

ピンポーン

フラン「はいー？」

ガチャ

ツナ「やあ、フラン…今日学校来てなかったけど…どうしたの？」

フラン「あー…雪が熱を出してしまっただけ…といっことでミー達は二三日行けそうにありませんのでー」

ツナ「え！？大丈夫なの！？」

フラン「多分大丈夫ですよー」

ツナ「…分かった…じゃあ行くね」

フラン「検討を祈りますー」

続  
く

標的十一 敵であり味方!? 風邪引き雪(後書き)

前回、晴の守護者の思いとか書いたけどやっぱりオカマやムッツリの番書きたくなかった…

次回…雪の対戦

## 標的十二 雪の対戦

雪 side

二日後の夜

雪「復活<sup>リボーン</sup>!!」

フラン「おおー…雪が復活<sup>リボーン</sup>しましたー…藪医者<sup>リボーン</sup>の薬が効いたんですねー」

雪「そうみたい^^明日から学校…」

ピンポーン

雪「?…こんな夜中に誰だろう?」

ガチャ

ツナ「あ、雪ちゃん」

雪「ツナ君!!」

ツナ「大丈夫なの?」

雪「うん…もう完全に復活<sup>リボーン</sup>したから大丈夫だよ^^」

ツナ「そうなんだ…」

元気が無い…ランボ君がやられたのね…

リボーン「明日、雪の番だぞ」

雪「え？マジ？」

ツナ「うん…大丈夫？」

雪「うん、ツナ、心配有難う…私は大丈夫」

ツナ「じゃあまた明日ね」

雪「うん^^」

ツナ君達が去っていった

フラン「明日雪の番ですかー…」

雪「そうみたい…」

フラン「雪…明日学校休みましょー…怪我しちゃ元も子もないですよー？」

雪「でも…京子が…」

フラン「バイパーが守ってくれますよー」

マーモン「そっだよ…」

雪「マーモン…不法侵入…」

フラン「なにしにきたんですかー？」

マーモン「ちょっとね…雪の事だから明日学校行くなって言いそうだからね」

雪「マーモン…」

マーモン「雪…笹川了平の妹は僕が守るからさ…雪は無理しないで」

雪「…分かった」

マーモン「後…敵に言うのは変だけどさ…がんばってよね」

雪「…！！うん」

リボーンside

今、雪達の会話を盗聴している

どういう事だ？

…学校行くだけで怪我するとか…無理をするとか…

京子を守るとか…

調べてみる必要があるな…

雪side

次の日の夜

フラン「じゃあ行きましょー」

雪「う、うん…」

フラン（雪…）

並中

リング争奪戦…本気を出そう！！

獄寺「まだか？雪の奴…」

姫奈「きつとお私に恐れをなしてえ逃げ出したのよお」

獄寺「んなわけあるか！！」

ツナ「そうだよ！！」

ピカー

リボーン（来たか…）

雪「その通り！！」

シユタ

コロネロ「雪！！来たぜ！！コラッ」

京子「あー！コロナ君ー！」

了平「きよ…京子！？」

雪「なんかコロナを探してたから…ダメだった？」（ちらっ）

話しを合わせたの目線

京子「う、うん…」

京子（本当は私から頼んだんだけど…）

姫奈「こわ〜い…」

スクアール「ヴオオオオイ！！お前か！！姫奈達を虐めるカス共は  
！！」

雪「はあ！？私達虐めた覚えは無いわ！！」

ベル「しし…お前最低」

フラン「暗殺部隊をやっているあんた等よりかはマシだろ…」（ボソ）

リボン（そう言う事が…）

京子「私達はやってない！！…ツナ君達は信じてくれるよね？」

ツナ（この目…）

ツナ「うん…俺は雪ちゃんや京子ちゃんを信じるよー！！」

雪「ツナ君…行って来るね」

姫奈「行って来るねえ」

マーモン（雪…頑張ってる…）

ザンザス（アルコバレーノのおしゃぶりが光った？コロネロは既にいた…マーモンもチエーンを巻いてる…だったら何故？）

雪「おっと…チエルベツロ」

チエル1「はい…」

雪「ボンゴレリング以外のリングの使用は？」

チエル2「構いません」

チエル1「では、校舎A棟にお越しく下さい」

校舎A棟

ガチャ

ツナ「サムッ」

雪「へえ…予想通り…」

クロームに特訓してもらってよかった

チエル2「雪の守護者以外の皆様、外へ出てください…」

ツナ「じゃあ頑張つてよ…」

雪「うん」

チエル1「では…吹雪雪vs雪虹姫菜…バトル開始」

雪「じゃあ…本気でいかせてもらいます」

私はおしゃぶりを首に掛けた

姫奈「…!?!」

スウー

雪「これが私の本当の姿…吹雪 雪!!参ります!!」

レヴィ「まさか…アルコバレーノだとはな」

マーモン「僕は知ってたけどね」

私は本来の姿になった

リポーン「世界最強の赤ん坊…アルコバレーノが虐めをすると思うか？」

ヴァリアー・マーモン「……………」

雪「雪の舞!!」

姫奈「この程度？」

っ…思ったより強い

私は雪の様に舞ったけど相手の相手の鞭に捕まってしまった

雪「くっ…」

霰『お前じゃダメだ！！アタシに変われ！！』

雪「でも！！！」

霰『完璧になるんだろ？お前じゃ完璧になれない！！』

雪「っ」

霰「それでいいんだよ！！はあ！！！」

姫奈「きゃあ！？」

ツナ「また…雰囲気が変わった」

獄寺「なにかひとり言を言ってたみたいですけど…」

アタシがナイフを投げ、姫奈の手を掠め…そして姫奈は怯み鞭が緩んだ

フラン（雪…霰、雪を無理させないでくださいー）

京子「雪ちゃん…」

ベル「しし 力任せじゃ、姫には勝てないぜ」

スクアーロ「その通りだあ！！」

フラン「もうちょっと静かに観戦できないんですかー？アホのロン毛に墮王子（ボン）」

フラン（しかし…相手の言う通りですねー…霰…暴走しなきゃいいですけどー）

霰「はあああああ」

アタシは雲と雪の炎を燈してナイフを投げた

姫奈「これ位すぐに避けられるわ」

フラン「ふっ」切り裂き姫…プリンセス・ザ・リツパーの本領発揮ですー」

ベル「は？王子の通り名に似てるし」

姫奈「なつきゃあ」

ベル「な？何が！？」

マーモン「ムム…簡単なトリックだよ…本物のナイフを幻術で隠し偽物のナイフを作り出す…又は大量の幻覚のナイフを作り出しその中に本物のナイフを忍ばせる…それが切り裂き姫の戦闘スタイルだ

よ

ベル「術士だったのか…」

マーモン「そうだよ…まあ…最初に言った戦闘スタイルでほとんど戦う為なにか起きたのか分からないまま、相手は殺される…暗殺者向きだね」

フラン「ミーの最高の彼女&相棒ですよー」

ベル「あり！？お前女じゃなかったのか？」

フラン「うわー…ショックですよー、最低ですよー」

霰「外野！！五月蠅い」

姫奈「隙あり」

スウー

姫奈「何ですってえ！？」

霰「残念幻覚でしたー」

フラン「あー…完全に遊んでいますねー……たく……姉妹そろって遊びが好きですねー」

フラン（…まあ…雪の場合は遊んでる様に見えて実は殺すのをためらってるだけですけどねー）

姫奈（こうなつたら…!!）

姫奈「私はあ、絶対にい、嘔吐き姫には負けないんだからあ…!!」

フラン「あいつ…!!NGワードを…!!」

一同「え？」

霰「嘘…吐き…姫？…嫌…嫌…嫌あああああ…!!」

フラン side

それから…霰は感情の無い瞳になり無表情で相手に向かってゆく

…暴走ですー

ツナ「ど、どうなってるの!？」

フラン「雪は…二重人格なんですー」

ツナ「う、うん…それくらい俺にも分かるけど…」

フラン「昔…雪には霰というお姉さんがいましたー…ある日死んじやって…それから雪は霰という人格を持つ様になりましたー…霰の人格はとんだ暴れ者なんですー…それが暴走してしまっ…」

獄寺「それがあの暴走とどう関係あんだよ？」

フラン「霰が死ぬ前…霰と雪は虐めにいましたー…嵌められて…クラスの皆にも裏切られ…仕舞いには親友にまで裏切られましたー

…その時の異名が『嘔吐き姫』ですー」

マーモン「つまり…あの暴走は精神的なトラウマってことだね」

フラン「そうなりますねー…ツナ…部下として…お願いがありますー」

ツナ「へ!?!」

フラン「ボス…この雪戦を棄権したいんですー!?!…このままじゃ…雪も…相手も…危険ですー!?!」

獄寺「でも!?!そんな事したら!?!」

フラン「お願いですー」

京子「私からもお願い!?!ツナ君!?!」

リボーン「どうするんだ?ツナ」

ツナ「…分かった!?!この勝負!?!棄権する」

続く

標的十二 雪の対戦（後書き）

次回…霰の暴走

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0132z/>

---

リボーンに転生トリップしちゃいましたー!?

2011年12月16日01時49分発行